
erlap -Instead of Infinite Stratos's Story-

十六夜鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Overlap - Instead of Infinite
Stratos's Story -

【Nコード】

N3547T

【作者名】

十六夜鈴蘭

【あらすじ】

IS操縦者の育成機関、IS学園。とある少女は自らの変革を求めその門をくぐる。しかし、今年のIS学園には一人のイレギュラーが

一話 プラスチック・レンズの回ころう(前書き)

原作未読者には不親切な仕様となっております。ご容赦ください。

一話 プラスチック・レンズの向こう

4月 日 晴れのち曇り

明日からはいよいよあのIS学園に入学する。これまでは地味って言われ続けたし、友達も少なかつたけど……これからは変わってみせるって決めたんだ。

朝、鳥のさえずりが聞こえるような清々しい一日の始まり。華河遥^{はなかわ はるか}は寮の自室で目を覚ました。目覚まし時計はまだ鳴っていない。彼女は寝ぼけながらベッドサイドのメガネを手に取る。目に入ってくるのはホテルの一室のような清潔感と簡素さの在る室内。ここで生活し始めてから二日経ったが未だに慣れない自室であった。ふと、隣のベッドが目に入る。そこはすでに、もぬけの殻でシーツやらがぐちゃぐちゃになっていた。

「おはよう。もう起きたの？ 早いね」

突然背後から、声をかけられ思わず窓のほうに振り返る。一瞬、窓から差し込む朝日が目を刺す。だんだんと慣れてくるとそこに立っている人物がハッキリ見えるようになった。

「？ どうした？」

「……いえ、なんでもありません。ちょっと眩しかっただけで……えっと……高原さん^{たかはら}」

「ははは。だからボクのごときは泉^{いずみ}でいいって。たったふたりのルームメイトなんだからさ。ハルちゃん」

「は……ハルちゃん!？」いきなり母親にすら呼ばれたことの無い

フランクな呼ばれ方をされ、とまどう遙に、泉はおどけて首をかしげてみせる。

「ハルちゃんじゃ嫌だったかな？　じゃあハーにゃんなんかどう？」

「！？」自らのイメージとはかけ離れた名前に遙はいっそうの戸惑いを顔に出してしまう」

「ハハハハ！　ホントにハルちゃんは愉快だね。思ってることが全部顔に出ちゃってるよ」

出会ったとき（と、いつてもつい二日前だが）から妙にフランクな泉に、遙は既に何年来かの友達のような親しみを感じていた。もし、ルームメイトが付き合にくい人だったら……などと心配する必要性は皆無だったようだ。

「高原さ……泉は何を見てたの？」

「単に見てただけじゃなくて、コレを……」

そう言つて、泉は首からさげたレンズの大きなカメラをかがけてみせる。

「初登校記念に一枚ね」

泉の趣味がカメラであると入寮のときに自己紹介されていた。もうオンボロで扱いにくいんだよね。と言いつつ、愛おしそうにカメラを使っている泉の姿を見て、遙は泉が本当に好きなんだな。と思っっているのだった。

「そうだ。初登校記念にハルちゃんも撮ってあげるよ！」

「え……！？」

「いいから！　いいから！！」

「いや……でも！！　寝起きですし！！　パジャマですし！！　私なんか撮ってもつまらないですから！！」

「ぬふふ。そんなことないよ？　はだけた胸元とか、寝起きのメガネとか……。それにちゃんとボク専用にするから！！」

「いやああああ……！！！！！！」

遥の朝は早い。確かに今日も早かったが、いつも早いのだった。遥の髪はクセが強く

朝念入りに整える必要があるのだ（中学時代には毎朝の勉強も欠かさなかったせいもあったのだが）。鏡を覗き込みながら、遥は後ろで堂々と着替えている泉の髪を見る。泉の髪は艶々とした黒髪のワレン。とても綺麗に揃っている髪形を遥が羨望の目線で見ていることはいうまでもない。

もう一つ、遥には朝を忙しくさせる理由があった。それは着替えである。遥の学校は私立の学校で、私服で登校していたため、どれを着ていけばいいのか毎朝迷ってしまうのだった。服なんてどれも同じ、といくら考えてもついつい服をとつかえひっかえ考え込むのは日課のようであった。数少ない友達には、「デートに行くわけでもないのに、そこまで考え込むのはよく分からない」といわれ続けていたが、自分でも理由は分かっていたのでどうしようもないのだった。

「あ……そうか。今日からは制服なんだ」

遥はクローゼットを開き、かけてあった制服を手取る。カスタム自由で有名な学園の制服、遥の制服の上は標準的なものであったが、下はロングスカートになっていた。

「うっわ。長いスカート……。今はまだいいけど夏は暑くない？」ふと、クローゼットを覗く遥の背後から、泉が制服を覗き込む。泉の制服は普通のミニスカートである。ブラウスの胸元を開けて青いネクタイを緩く巻き、スカートから伸びるスラリとした脚にはソックスも履かず、同性の遥でも健康的な色気を感じるほどだった。

「うん。大丈夫。慣れてるから。……それにミニは恥ずかしいし」思わず本音もこぼれる遥であったが、後ろの泉と自分を比べたらそう思わずにはいられなかった。泉は遥より身長が5cm以上も高く（現に遥は入室した日は、170cm近い身長で泉に見とれてしまったものだった）、脚やら胸やら何処をとつてもいわゆるモデル体形で、各パーツが貧相な遥とはあまり比べ物にならなかった。た

だし、持てる者とは得てして、持たざる者の悩みなど分らないよ
うで、不思議そうに首をかしげているのだった。

「別に周りには女の子しかいないし、いいじゃ……あ……」

“とある事”に気づいて思わず泉は声をあげてしまう。

そう。今年のIS学園には“若干の”イレギュラーが混じってい
るのだった。

メガネをコンタクトに変えるとまるで世界が変わったかのようだ
った。そんな風に思えてしまうのは、視界の変化というより心の変
化だということに、期待やら不安やらが入り混じり胸をいっばいに
していた遙は分かっていたようだった。

IS学園とはいえ、入学式なる儀式は別段大したものではない。
ホームクラスや座席などはあらかじめメールで連絡されているので、
各自ロッカーにカバンをしまい、体育館（と呼ぶにはしばし近代的
過ぎる気もするが……）に集まって退屈な話を右から左へと受け流
すだけである。もし違いをあげるとするなら、来賓には各国からい
かにも偉そうな人々が出席しているくらいなものであった。

そんな式をおえて各クラスでのホームルームとなった。遙の隣に
は幸運なことに泉が座っており、遙はすこし安心する。しかし、ざ
わつくクラスに一人の生徒が入ってきた瞬間、教室内が一瞬水を打
ったように静かになった。その生徒は我関せず、というよりはいか
にも気まずそうに教卓の目の前の席に無言で腰を下ろす。

「……あれが……」……意外と……」そんな様な声でだんだんと
教室内が再びざわめきだすにつれて、その生徒の肩身が狭くなつて
いく。そんな時、再度教室の扉が開いた。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

入ってきたのはやや身長が低い、子供っぽい先生であった。遙は
先ほどの入学式で副担任として自己紹介をしていた彼女、やまだ まや山田真耶

先生をみる。真耶は若干おどおどしながら挨拶をして教室をながめる。しかし教室内はシーンと静まり返り、なんともいえない沈黙が横たわっていた。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
先生の言葉を受けて、出席番号の若い順に自己紹介をしていった。そしてついに“お”の順番となった。

「えー……えっと、織斑一夏おりむらいちかです。よろしくお願いします」
立ち上がり、振り返って自己紹介するこの世界唯一の男子IS操縦者、織斑一夏。今年のIS学園でもっとも有名な人物である。しかし、どんな有名人であつても知ってるのは名前くらいなもの。しかも彼を除いてここにいるのは、箸が転がっても面白い年頃の乙女たち。自己紹介が名前だけというのは少し味気なかった。当然、クラス中に、え？それだけ？という空気が流れる。真耶などはその雰囲気きずなのせいか、若干涙目になつてすらいた。

「以上です」空気を讀んだか読まないか、一夏は自己紹介を締めようとする。しかし、その一秒後、周りが引くくらい派手な音を立てて、一夏は後頭部を強打される。

「げえっ、関羽!？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

再び良い音をたてて二度目の打撃を加えつつ、的確なツツコミを入れたのは、黒いスーツに身を包み、スラリとしたスタイルと鋭い吊り目がどこかオオカミを思わせる女性であつた。その女性は、真耶と二言三言言葉を交わすと、生徒のほうに向き直る。

「諸君、私が織斑千冬おりむらちゆいだ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者いは出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才まで鍛えぬくことだ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞けないな」

そんな暴力宣言を言い放つた瞬間、教室中がコレまでとは、うって変わり、黄色い声援が響き渡る。「ファン」、「千冬様」、「北

九州」、「お姉様」、「羨」などという単語が飛び交う中、何人かの生徒はその雰囲気に取り残される。遥ももちろんその中の一人で、「織斑くん」と織斑先生ってやっぱり親族なのかなあ……」などと呑気なことを考えているのだった。

「いや、千冬姉、俺は」「織斑先生と呼べ」パンツ！ 本日
三度目の強打音が響く。

「え……？ 織斑君ってあの、千冬様の弟……？」

その一言が発せられた瞬間、教室が火に油を注いだように一層騒ぎ出す。しかし、今度はすぐに千冬の一括が入り、教室は静かになった。クラスの生徒の多くは、未だ追求し足りないといった様子ではあったが、その後は特に何事も無く自己紹介が進んでいった。泉はもちろん、遥も無難に自己紹介を終えクラス全員が自己紹介を済ませた。その時、狙いすましたかのようにチャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君にはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事しろ」

織斑先生がそう言い放って、SHRは終わった。クラスは興奮冷めやらぬ中、一時間目のIS基礎理論の授業へと移っていくのだった

つつがなく午前中の二時間の授業は過ぎていった。遥は小奇麗にまとめられた自分のノートを閉じる。小学生からの根っからのガリ勉 遥は若干の退屈さを覚えながらも、今まで勉強してきたものとはまったく違う勉強に新鮮味を感じていた。隣の泉も普段はあまり勉強しているイメージではないが、授業では高度な質問をすることもあり、IS学園のレベルの高さをうかがわせていた。確かに、授業内容はまだ入学の手続きのときに渡された参考書をなぞる程度であったので、学園に入学するような生徒にとっては特に問題は無かった。唯一の例外、一夏は分からないところを真耶に聞かれ、「

全部」とあまりに情けない返答をし、実姉に殴られてはいたが。

「ハルちゃん、ノート綺麗にとるんだねー」「泉は、……ノートとらないんだね……」

二時間目終了の休み時間、遙と泉がそんなたわいの無いやり取りをしていると、なにやら教室の前のほうがざわつく。遙はどうせ織斑君絡みの事だろうと特に気にも留めなかった（一夏の周辺には休み時間ごとにクラス関係なく人々が群がりまるで動物園のパンダのようになっていた。一時間目の休み時間のときは隣に座っていた髪の長い女子を引き連れて廊下に出たため、クラス内は静かであったが……）のだが、今回のざわつきは少し毛色が違うようだった。遙と泉もそのちよつとした違いを感じ取ったのか、件の人物に顔を向けた。

「まあ！ なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

教室中に聞こえるくらいのヒステリー気味な声を上げているのは、白磁器のような肌に鮮やかな金髪、透き通る蒼の瞳を持った、まごう事無きコーカソイドの少女。わずかにロールがかかった髪とその流暢な日本語の口調からは「いかにも」な雰囲気か漂っていた。とはいっても、ISが発明されて以降、女性の立場は圧倒的に男性のそれより高く、男性は奴隷か労働力程度にしか扱われないため、この少女のような態度はさしてめずらしいものではなかった。むしろ、一夏を興味の対象として客寄せパンダくらいに扱ってくれる周りの女生徒達のほうが、学園の外では少数派だろう。

「……」

一夏は、畳み掛けるような目の前の少女に閉口する。一夏はこういう女性の権力を笠に着たような手合いが苦手であった。何よりも、力があるというだけでそれを振りかざす暴力的な態度が嫌いであっ

た。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

すこし離れたところからでも頭が痛くなるような会話を繰り広げる二人を遥は呆れ混じりに見ていた。

「セシリアさん、あれだけ自己紹介のときに代表云々って言ったのに、織斑君はまったく聞いていなかったみたいだね」

泉は苦笑いしながら言う。

「うん……なんか、私たちには関係なさそうだけどね。」

遥も泉の言葉に頷く。一夏とセシリアは未だに言い争って（？）いた。（確かに話を聞いていない上に、物事を知らない織斑君も悪いけど、あそこまで噛み付くオルコットさんもオルコットさんだよね……。）遥はそんなことを思いながら眺める。

「でも……セシリアさん、もしかして織斑君に気があるんじゃない？ そうじゃなかったらあんなにこだわるかなあ」

「たぶんそんなこと無いと思うけど……オルコットさん、立ち振る舞いとかが本当に良い家の出身みたいだし、ただ単純に織斑君が気に入らないだけじゃないかな」

「ふーん。まあ、ボクには色恋沙汰はよく分からないけど、あの二人、息が合ってるようにみえるんだよねえ」

泉がどこか含みをもったいぶった言い方をしたとき、ちょうど三時間目のチャイムが鳴った。セシリアはまだまだ言い足りないといった顔で自分の席に戻る。数秒すると千冬が真耶を引き連れて、教壇に立った。

「それではこの時間は実践で、使用する各種装備の特性について説明する。が、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を

決めないといけないな」

「はいっ！織斑くんを推薦します！」「私もそれが良いと思います」

千冬が言い終わったか終わらないかのタイミングで、クラスの誰かが一夏を推薦し始める。それに呼応する生徒も多く、『彼ならなんとかしてくれる』という雰囲気にも包まれた。遙も自分が立候補する気も無かったのでそれでもいいかな、と軽く捉えていた。一夏もそんな雰囲気を知ってか知らずか、反論しながら立ち上がるも千冬に一蹴される。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

当然、クラスの後ろの方から甲高い声が異議を唱えた。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

興奮のあまり、立ち上がって一気に言いたい事をまくしかけるセシリア。遙は実姉の前で弟をあれだけ扱き下ろすセシリアを危ぶんだが、実姉、千冬はいつもと変わらない様子で状況を見ていた。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

カチン。一夏のなかで何かのスイッチが入る。

「イギリスだって大したお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

一夏はそう堂々と言い放った。その言葉を聞いた瞬間、女子生徒全員がセシリアの顔色がみるみる変わっていくのを見る。一夏にとってもいわゆる“口が滑った”というやつで、恐る恐る後ろを振り返った。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？
も、もうこうなつたら……決闘ですわ！！ 織斑一夏！！」

そこには机を叩き怒りをあらわにするセシリアが。一夏は自分の失言に後悔するも、男として譲れないところであつたのか、自らも立ち上がり、セシリアを正面から見据える。

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。でも侮るなよ。
女子が相手でも真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「貴方ごときに本気を出すまでもありませんが、ちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの
実力を示すまたとない機会ですわね！」

二人の気迫に押され、クラスには緊張した空気が張り詰める。その静寂を打ち破り、いままで静観していた千冬が口を開いた。

「どうやら、話はまとまつたようだな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんつと千冬が手を叩くと、クラス全員が一斉に教科書を開いた。立ち上がっていた一夏も席に座り、真剣な表情で教科書に向き合つたのだ。

一話 プラスチック・レンズの向こう(後書き)

ここまでの閲覧ありがとうございます。更新は出来る限り早くしたいと思いますので、引き続きお楽しみください。

二話 飛び散る火花は白と蒼【part 1】

今日の授業も終わり、遙は荷物をカバンにしまった。教室にはまだ生徒が残っていて、先ほどのセシリアの宣戦布告の話に花を咲かせていた。泉は授業が終わるといつの間にか消えてしまったので、遙はしばらく待っていたが、一向に帰ってくる気配が無いので、一人で帰ることにしたのだった。

一年の校舎からであるとそこには、青でないリボンを結んだ制服やジャージ姿の生徒たち、つまり、遙にとつての先輩たちがところ狭しと陣取り、旗やらを掲げていた。遙はそのあまりの熱気に一歩後ずさってしまふ。

「やー。噂どおり、すごいねこりゃ。」

突然、遙は後ろから抱きしめられたと思つたら、頭の上から泉の声が聞こえた。(噂どおり?) ということはコレが昨日泉が話していた部活の勧誘? 遙はそんなことを思いながら、目の前の光景に圧倒される。確かに先輩たちの間を通り抜ける生徒一人一人に声をかけ、ビラを配ったりしていた。遙は、IS学園では学業もおろそかにしない上に、IS操縦に必要な知識も詰め込まれるので、部活をしている暇はないと思ひ、泉の話に半信半疑であつたが、目の前でまざまざと見せられ、思わず感心してしまう。特に遙は中学の頃から部活に入ることなく、ずっと家で勉強していたので、この空気になじめずにいた。

「泉は何か部活するの?」

泉の胸があたつたり、シャンプーのいい匂いや体温を感じて、慣れないスキンシップにドギマギしながらも、遙は泉にたずねる。

「ボクはどうしようかなあ。うん、まだ未定かな。ハルちゃんは?」

「私は……」

反射的に、「やらない」と言いかけた口を閉じて、遙は考える。

「私はどの部活にかは入ろうと思う」

意をけっしてそう告げる遙。高校以前の遙に比べると大きな進歩であった。

「んー……じゃあボクはハルちゃんが入った部活が面白そうなら同じ部活に入るのかな。ハルちゃんならボクが入らなそうな部活を選んでくれそうだし。」

遙は内心、そんなこと言われても……。と思わないでもなかったが、まずは行動してみようと覚悟を決めて、先輩たちの群れへと突入した。

「水泳部にはいりませんか!?」紺のスクール水着の生徒がビラを押し付ける。「手芸部に来ませんか?」手製と見えるエプロンをつけた生徒が服を引く。「新体操」「チエス」「剣……」

途中からはあまりに大勢の人間に声をかけられ、遙は駆け足で群れを抜ける。突入したはいいものの、結局何もできずじまいな遙であった。

「にしても、たくさん部活があるんだねえ」

泉はもらったビラをパラパラとめくりながら言う。「そうだね……」遙は力なく返事をして、先輩たちの群れを振り返る。(正直、流石にあのテンションはついていけないかなあ)遙は若干弱気になつていた。ふと、遙は群れから少し離れた所に看板をたてるだけで特に勧誘もせず、椅子に座っている先輩を見つける。髪が異様に長く、顔はほとんど見えない。遙には一瞬、背を向けているように見えたとであった。

「ハルちゃんどした? くんと何々…… ライフル射撃部、ねえ」

いつの間にか、泉が遙の視線を追って、その先輩の横の看板を読んだ。遙はコンタクトをつけていたが、はっきり見ることは出来なかった。泉は視力も良いようだ。遙は泉に対する羨望をまた強めた。「泉、ちよつと行ってみようか」

珍しく遙が率先して泉の手を引いた。ここで一人で行こうとせず、あくまで泉を連れて行こうとしたところは遙らしくあったが。泉は

特に何も言うことなく、遙に従う。

「すいません」

遙は椅子に座った先輩に声をかける。その先輩は近くで見ると遙よりずっと小柄だった。顔はあまり動かさず目だけでこちらを見る。

「……やる？ ……ライフル」

想像通りのか細い声で先輩は遙たちにたずねる。周りには他の部員らしい影も見あたらなかった。泉は正直、若干不安を感じていた。失礼とは思いつつも、他の部活と比べてここには活気のカケラも見当たらず、マトモに部活として機能しているか危うく思えたのだ。IS学園であれば、そのような事は無いとは分かっているのに、泉は入部するかと尋ねられると思わず断ってしまいそうな雰囲気を感じ、周りに他の一年が居ないのもきつとそういった理由なのだろうと推測する。しかし、そんな風に考え込む泉を尻目に、遙の瞳は輝いていた。

「私、入部します！」

泉は結局、遙の興味津々と語る無邪気そうな、ここ数日の間で感じた遙のイメージとはズレた瞳に押され、遙とともに入部を決めた。理由は曖昧だが、なんとなくやれるような気がしていたのも事実だった。先輩はやはり先程の籠目マミ先輩かこめ一人で、二年だが部長をしているということを知った。自己紹介だけした後とりあえず今日は帰れ、と二人は言われたので、寮の部屋へと戻って来たのだった。二人は部屋で部活について話したが、遙にとっても入部したのは直感だったらしく、二人はしばし笑いあうのだった。

遙と泉が部屋で一息ついているとドタドタという音がした後、なにやら廊下が騒がしくなるのが聞こえてきた。聞こえてくる足音はだんだんと数を増していく。遙と泉は顔を見合わせ廊下に出ようとする。泉は完全に着替えている途中だったので、上はブラウス一枚

という格好ではあったが、まあいいかとドアノブをひねる。ドアを引くとまず目に飛び込んできたのは、廊下を埋め尽くす生徒だった。二人は何とか隙間に体をねじ込んで部屋をでる。すると、すぐに生徒の一群から抜けて、ギャラリを集めている原因が良く見えた。

そこに居たのは件の織斑一夏、場所は遙と泉の部屋の隣の部屋の前だった。一夏はなにやら青ざめた顔をしている。一夏の見つめるドアには穴が一つ空き、木刀の切っ先がのぞいていた。木製のドアに木刀が刺さっているという異常事態を遙以外は気にも留めていないようで、「織斑君の部屋ここなんだって」などといった会話が飛び交っている。

「……篝、篝さん、部屋に入れてください。すぐに。まずいことになるので。というか謝るので。頼みます。頼む。この通り」

頭上で合掌という情けないポーズで一夏は扉の向こうの人物に懇願した。そのポーズのまま2・3分が経ったかという時、扉が開く。「……入れ」

出てきたのはシャワーでも浴びていたのか黒くつややかな髪を濡らし、特徴でもあるポニーテールを下ろした少女。遙や一夏と同じクラスの篠ノ之篝しののほのかであった。彼女に許しをもらうと一夏はそそくさと部屋の中へと消えていった。

一夏が居なくなると、少女たちは一層姦しくなる。ほんの数分の間の出来事であったが、どうやら既に一夏の部屋の場所と篝との相部屋という情報は、大きな話題となっているようで、何人かは早速その場に居なかつた友人に事の次第を伝えに行ってしまった。

「年頃の男女が一つの部屋の中ねえ……それは確かに話題になるわな」

泉もどこと無くニヤつきながら、うんうんとうなずく。なんだかんだでこの手の話題が嫌いな女子はいないのだった。ただ一人、遙はそのシチュエーションに何だか気恥ずかしくなり、部屋へと戻った。

遙と泉が部屋に戻った後も、隣の部屋は騒がしく、防音設備が悪

いわけではないのだろうが、部屋を走りまわる音や男の絶叫が聞こえてきていた。結局、静かになったのは遙がその日の勉強を終えて、ノートを閉じようかというときだった。泉も初めのうちは起きていたのだが、零時を過ぎた頃には寝落ちしてしまっており、すやすやと気持ちよさそうに寝息をたてていた。

いざ、遙が寝ようかとベッドにもぐりこんだとき、コンコンとドアがノックされる音が聞こえてきた。枕元の時計を見ると午前一時すこし前、こんな時間に誰だ、と思いつつ遙は扉を少し開ける。そこにいたのは十数人の生徒、しかもどこか見覚えのある顔だと思ったら、全員がクラスメイトであった。

「あの……何か？」

遙はちよつと異様なその光景にビククリしつたずねた。

「少しだけでいいから、部屋に入ってもいいかな？ あ、高原さんもう寝てるのか……」

でも静かにするから」

一番前に立つクラスメイトにそう言われ、遙は迷いながらもみんなを部屋の中に入れることにした。消灯時間は過ぎていたので早速出歩いているのを見つかるのは都合が悪いし、泉なら隣の部屋がドタバタしていても寝られたくらいなので大丈夫かなと思ったからである。クラスメイトたちは、お邪魔しますと音を立てないように入ると入ってきた。何故か皆コップやらワイングラスやら聴診器を手にしていて。みんなが入りきるとその中の一人が声を潜めて宣言する。

「第一回 織斑&篠ノ之観察大会」

二話 飛び散る火花は白と蒼【part 2】

結局、昨夜は一夏も箒も寝静まっていたので、ナントカ大会は失敗に終わったのだった。遙は若干、よくやるなあと呆れてはいたが、部屋に来ていたクラスメイトと打ち解け、仲良くなっていた。

翌朝、朝食のために生徒たちは食堂に集まる。当然、一夏は恰好の好奇的になっていたが、今日は女子三人組が声をかけたらしく、一夏と箒、女子三人組といったヘンテコな集団を作っていた。周りの生徒たちは、「出遅れた」といった雰囲気で、その集団を見ている。中には、あれは商売になるかも、と言っていた生徒もいたのを遙は聞いていた。

その後、食べるペースが遅いと教師兼寮長であつたらしい千冬に一喝され、生徒たちはバタバタと朝食を食べるのだった。

今日も午前中はISの制御に関する授業のみで、遙は特に問題なく授業をこなしていた。一夏は一夏で、未だ授業がちんぷんかんぷんかつ女子校の雰囲気慣れず、授業に波をたてていた。休み時間ごとに一夏の周りに人垣ができる光景も既に見慣れた光景。一夏が何かを言っただけに叩かれるのもおなじみになっていたのだった。

そんな風に一日の授業は終わり、遙と泉は部活へとむかう。IS学園には室内射撃場もあるのだが、敷地の一番端っこのほうに隠されているかのごとくひっそりと建っていた。射撃場の扉を開けると、入ってすぐのところテーブルが置かれており、そこにジャージ姿のマミが座って本を読んでいた。

「……きた」

マミは本から目を離さずに言う。遙はこの先輩がISを動かしているところを想像できないくらい、アクションの小さい人だなと思っただ。

「結局、他の新入部員はいなかったんですね」

泉はずけずけとマミに言つてのける。しかしマミはそんなことは露ほども心配していないようで、普通に頷く。

「……ライフルはISの操縦訓練の必須科目だから……わざわざ生身でやる人はすくない」

そう言いながら、マミは壁にかけてあったライフルを手に取り、遥と泉に一丁ずつ渡した。長さは一メートル、重さは五キロくらいあるだろうか。

「……それが競技用のエアライフル」

遥は想像していたとおりずっしりとした鉄の塊に少し興奮を覚えていた。壁には他にもいくつかのライフルがかけられており、中には普通のピストルのようなのもあった。それらをじっと見つめる泉に気づいたのかマミは、そちらも手に取る。

「……こっちはエアピストル……IS操縦者なら両方やるべきだとマミは卒業した先輩に言われた」

そして、マミはおもむろにテーブルの上におかれたグローブをつけて、奥の扉を開ける。奥はガラスで仕切られていて、遥と泉の位置からでも様子が良く見えた。外観では気づかなかつたが、この建物は細長い建物らしく、50Mくらい先に的がおかれていた。マミは壁にかけられていた自分用らしいライフルに弾をこめて、的に向けた。マミが静かに引き金を引くと、弾が的に中る音が聞こえた。マミの横のモニターに中つた場所が表示される。中つたのは的のど真ん中だった。マミは再び何事も無かつたように遥と泉の前にやってきた。

「……本当なら所持許可が必要だけど、学園の中は特別例外指定されてるから……早速教えようと思う」

マミはいつもどおり無表情だったが、その暗い瞳は心なしか楽しげな様子だった。

勉強と部活、寮生活などの環境の変化に生徒たちが慣れてきたか

と思われる入学から一週間たった月曜。放課後の第三アリーナには遙達、一年一組の生徒が勢ぞろいしていた。これからここで自分たちのクラス代表を決めるための一戦が行われるのだ。既に対戦者の一人、セシリアはアリーナ・ステージ内に入っており対戦相手はいまや遅しと待っていた。

その手には2メートルを超す長大な銃器、六十七口径特殊レーザーライフル《スターライトmk?》が握られている。

「あら、逃げずに来ましたのね」

ピット・ゲートから眩しいほどの白い機体が飛び出し、宙を舞つたのをみて、セシリアは腰に手を当てたポーズのまま鼻を鳴らす。

形容する言葉が『白』としかでてこない無骨なIS、『白式』を繰り一夏はセシリアの前へと降り立った。

「最後のチャンスをおあげますわ」

アリーナの中にスピーカーを通したセシリアの声が響く。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら許してあげないこともなくってよ」

「そういふのはチャンスとは言わないな」

「そう？ 残念ですわ。それなら…… お別れですわね！」

刹那、独特の音と共に、レーザーが一夏の体を撃ち抜く。一夏も体をそらして避けたため、直撃ではなかったが左肩の装甲が吹き飛び、余波に顔をゆがめた。

「なんか織斑君弱すぎない？」

セシリアの射撃を避けるだけで、まるで踊らされているをような一夏をみて、クラスの誰かがそう呟いた。確かにセシリアは入学以前から専用ISを所持していた代表候補生であり、一夏とは経験において知識においても段違いの存在ではあった。しかし、一夏も

ISを初めて触った時に入学試験のときに教官を倒してしまった男。試合はあまりに一方的過ぎる気もした。

「やっぱり、まぐれだったのかな？」「男でISを動かさせただけ、すぐかつただけかも」クラス中がそんな話になっている中、遥は一夏の動きをじつと観察しているのだった。

その視線の先で一夏はようやく武器を呼び出し（コール）、展開した。現れたのは一振りの『刀』。遠距離から攻撃するセシリアに立ち向かう武器としては不向きなことこの上ない。「ハルちゃん、そんなにおもしろい？」

隣に座っていた泉が遥の顔を覗き込む。遥の顔は真剣そのものだった。

「織斑君…… ISの挙動についていつてない。攻撃を避けようとして来てるって事はハイパーセンサーは正常に稼働してるのに、まるで動けないなかった……」

泉の声はまったく聞こえていないかのように遥はぶつぶつと呟いていた。

「専用機なのに体がついてこない……
そして、だんだんと動きはファースト・シフト良くなっている。もしかして、織斑君、一次移行前？」

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが始めてですわね」

セシリアは自分の周りに浮いている四つの自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』をなでる。セシリアの操るこの機体は、直接特殊（BT）レーザーを積んだ実戦投入一号機であったため、ブルー・ティアーズと名づけられていた。ブルー・ティアーズはフィン状のパーツ ビットに銃口が開いているという形で、操縦者の意思で動かすことが出来る。セシリアは、そのビットを操り一夏を追い詰めていた。

「では、フィナーレ閉幕と参りましょう」

セシリアはビットを操作し、一夏の間をつくりスライトmk

？を既に装甲の失った一夏の左足に狙いを定める。

「左足、いただきますわ！」

装甲の無い箇所へ攻撃を食らえば、操縦者を守るための『絶対防御』が発動し、シールドエネルギーは無くなり、一夏の敗北が決定する。

「ぜあああつ！！！」

一か八か、一夏は無理矢理加速し、セシリアとの距離を一気に詰めた。二人の機体はぶつかり、ライフルがそれる。

「なっ……！？ 無茶苦茶しますわね。けれど無駄な足掻き！」

セシリアが左腕を横に振り、ビットを一夏に向かわせた。その瞬間、一夏に発射されるレーザー。一夏はそれらを潜り抜け、一閃。宙に浮くビットの一つが青い稲妻を発して、爆散した。

「なんですって！？」

セシリアは驚愕し後退しながらも、腕を振りビットに指示を送る。

一夏はすこし笑う。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！」

一夏はまた一機、ビットを落とす。

「しかも、その時お前は攻撃をできない。制御に意識を集中させているからだ。そうだろ？」

「……！」

目尻を引きつらせるセシリアをみて一夏は凶星だと確信した。残りのビットは二機。これまでの戦闘で機動はほとんど読めていた。

(……いける！) 一夏は見え始めた勝機に、胸を躍らせた。

次の瞬間、一夏の予想通りにビット二機が迫ってきた。一機を振り上げた刀で切り裂き、もう一つを蹴りで吹き飛ばす。セシリアには完全に隙が生まれ、一夏の確実な一撃が入るタイミングだった。

「かかりましたわ」

にやりと笑うセシリアに一夏は本能的に後退する。ブルー・ティーズのスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティーズは六機あってよ！」

ラストのビット二機はレーザー用ではなく、ミサイル（弾道弾）用だった。

赤を越えて白い、その爆発と光に一夏は包まれた。

「あーあ…… やっぱセシリアの圧勝かあ」

ミサイルによる爆発を見て、観客席のクラスメイト達は立ち上がった。分かりきった結果といわれれば、確かに分かりきった結果であった。

「あれ？ ハルちゃん、行かないの？」

みんなが出て行こうとする中、ただ一人、遥はだんだんと晴れてきた爆煙を見つめていた。遥は誰に、というわけでもなく呟いた。

「ようやく、かな」

遥がスタンドでそう呟いたの瞬間、晴れかけていた煙を吹き飛ばし『白』が宙に輝いた。ところどころ、元々の装甲が消え未だ形成途中の箇所が仄かに光っている。ほかの箇所も今までは異なり、無骨なフォルムではなく滑らかなカーブを描いている。その様はまるで、近代的に変貌を遂げた中世の鎧のようであった。ステージ内ではセシリアが遠目で見てもうろたえているのがよく分かる。

「何あれ……？」

泉が、驚きながら遥にたずねる。

「一次移行…… 織斑君は今まで初期設定で戦っていたって事」

それじゃあ、専用機でもなかったってこと？ そう重ねてたずねる泉に遥は首肯する。それよりも遥が気になっていたのは、一夏の持つ刀のほうであった。

「モンド・グロツソの初代ブリュンヒルデ、織斑千冬の《雪片》ゆきひら」
……

鎬の溝から光が漏れ出ている機械的な刀。千冬の第一・二回モンド・グロツソにおける唯一の武器であった。

一次移行を終えて、本当の意味で専用機化した白式に一夏は勝利の確信を得る。しかし、いつまでもセシリアが黙っているわけも無かった。

「いつまでそうしてるんですの!?!」

ミサイル弾頭を再装填したビットが二機、セシリアの命令で一夏を襲う。射撃用ビットよりも早く、一夏の死角へと潜り込もうとした。しかし

「見える!?!」

一夏は、右手の刀、雪片ゆきひら式型を握り締める。横一閃。二機のビットは一太刀で両断され、同時に一夏は再度セシリアに向かって、突撃する。

「おおおおっ!」

一夏の握る雪片から零れる光がだんだんと増していく。刹那、雪片の刀身が光を帯びた。一夏がセシリアの懐に飛び込み、逆袈裟に切り払う。

『 試合終了。勝者 セシリア・オルコット 』

決着を告げるブザーとともに、勝敗を告げる声アリーナに響いた。

三話 反発係数1

「え？」

スタンドで鑑賞していた生徒たちの誰からともなく、呆気に取られたようなそんな声が漏れる。スタンドから見ている限りでは、さっきの瞬間において一夏に敗北する要素が見受けられなかった。明らかに攻撃を受けたのはセシリアで、斬りかかったのは一夏である。泉も他の生徒と共に訳が分からないといった顔をしている。遥にはそんな呆け顔の泉を見るのははじめてであったので、泉の顔を見て思わず、微笑まざるおえなかった。

「ハルちゃん、なんか知ってるの？」

泉も隣の遥の顔色に気がついたようで、遥にそうたずねる。周りを見渡しても、先程の勝敗に疑問を持っていないようなのは遥だけであった。

「なにか知ってるわけじゃないけど、想像なら」

「想像でもいいから教えてよ」

「うん。織斑君が持ってた太刀、見た目からしてたぶん織斑先生がモント・グロッシン大会のときに使っていた雪片だと思う。雪片の特殊能力は『バリアー無効化攻撃』。自分のシールドエネルギーを攻撃に転化する超攻撃型の能力。あの時織斑君のシールドエネルギー残量はだいぶ少なかったから、オルコットさんを攻撃する前に自分のエネルギーを使い果たしちゃったんじゃないかな」

「なるほど…… それで負けたってワケか……」

たぶんだけどね。遥はそう言いながら立ち上がる。周りの生徒も頭の上にクエスチョンマークを浮かべながらも三々五々戻り始めていた。

「さ、泉。私たちも戻ろうよ。」

シャワーが床を打つ音だけが音の無い部屋の中に響いていた。部屋の中はまるで高級ホテルの一室のような部屋。調度品は壁紙一枚、照明一つにいたるまで高級メーカーのオーダーメイド品である。とりわけ目を引くのはとてもシングルサイズとは思えないほど“広い”天蓋つきのベッド。数少ない例外の一つである部屋の隅に申し訳なさそうに置かれた普通のベッドとのコントラストが見る者に物悲しさ、もしくは同情の念を喚起させる。

「織斑、一夏……」

ミルクのような白い肌を熱めのお湯が伝ってゆくを感じながら、部屋の主である“少女”は呟く。その名前が口から出るたびに、“少女”の鼓動はどうしようもなく高鳴ってしまう。

「……………」

いままでに感じたことの無い感覚。甘くて、やさしくて、嬉しいのに身を焼くように熱くて、切なくて、胸を締め付ける感情。

この感情が何であるか“分かっている”が“知っていない”。ならば知りたい。この感情を。この感情の向こう側を。

シャワーが床を打つ音だけが音の無い部屋の中に響いていた。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

拳手をして質問したのは、一夏であった。この光景だけ見ると、ようやく一夏も勉強に対して必死に打ち込むようになったか、と思えなくも無い。

「俺は昨日試合に負けたんですが、なんでクラス代表になっ
ているんでしょうか？」

クラス代表決定戦（仮）の翌日、朝のSHRで一夏はクラスで一

人だけ暗い顔をしていた。朝、学校に来てみたら突然クラス代表にされている。しかも勝負にまけているのに、だ。一夏の疑問はもつともといえる。その疑問にこたえる声はクラスの後ろのほうから聞こえてきた。

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたんと椅子を鳴らして立ち上がり、恒例の腰に手を当てポーズをしながらそう言い放ったのは勝負の勝者、セシリア・オルコットその人であった。

「……なんかテンションが高い」

「ふふーん。これは面白い感じになったねえ……」

遙と泉はめいめいに呟く。セシリアの口上はまだ続いていた。

「まあ、勝負は貴方の負けでしたが、しかし考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですからそれは仕方のないことですわ。それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして――」

意識をしなければ気付くことのできないくらいの間をあけてセシリアはつづける。

「一夏さん」にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの」

「流石セシリア分かってる！」「よ！イギリスー！」そんな声がクラス中で飛び交い、朝一番のSHRとは思えない盛り上がりを見せる。

「ねえ、泉。オルコットさん、織斑くんを名前でよんでたかな？」

遙は、隣の泉にたずねる。

「いや、今までは苗字で呼んでたね。やっぱり、私の目に狂いは無かった。なんてね」

泉がそう答えたとき、机を叩く音が響き、静観していた筈が立ち上がった。どうやら、一夏のコーチはどちらか、翻訳すれば放課後に一夏を独占するのはどちらかということと言い争いが始まったよ

うだ。

「セシリアさん。代表候補生かつ実験機のテストパイロットが普通、反省したからなんていう理由にもならない理由で、大事な実戦の機会を減らしたりしないんじゃないかなあ」

「泉、何か言った？」

「いんや。何にも？」

遙は含み笑いをしている泉を横目にみながら、一夏もるともセシリアと筈が千冬に“肅清”される様を眺めていた。最後に千冬が一夏の代表就任に異議があるかたずね、満場一致（無効票一票）で一夏が代表に決定したのだった。

「というわけでっ！ 織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

ぱん！と景気のいい音を立てて、クラツカーの音が食堂に鳴り響く。今は夕食後の自由時間。どうやら一組の中でも手が回る人たちが、早速用意したらしい。壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と大きく書かれた紙がかけてあり、テーブルの上にはジュースやお菓子などが広がっていた。クラツカーも人数分以上（どういうわけか一組全員だけでなく他のクラスも混じっているので、三十個以上）揃っている。

「……………」

（どんだけ準備がいいんだよ…………）一夏は半ば呆れ気味に黙っていた。クラツカーから飛び出したひらひらの紙テープも今は何故か重く感じる。

一夏が紙テープの重さと隣に座っている筈にねちねちと責められていると、デジカメを片手に、見慣れない生徒がやってきた。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしまし〜！」

オーと一同が盛り上がる。一夏は若干嫌そうな顔をしていなくもなかった。

「私は、二年のまゆみ黛かおる薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺。じゃ早速、ずばり織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

薫子は名刺を渡すや否や、ボイスレコーダーを一夏に向けて、ずんずん質問し始めた。一夏が何言か話すと、「前時代的」とばっさり切り捨て、「適当に捏造する」と発言し、質問の相手をセシリアに切り替えた。なんともアグレッシブなひとである。

「ジャーナリスト精神的に捏造はまずいんじゃない？」

一夏や篤、セシリアのいる“中心”から少し離れた所に座っている遙は、薫子の言葉に思わず呟く。

「まあ、いいんじゃない？ 学校新聞なんだし、話題の男子生徒が古くさいこと言ったらガツカリだろうからね」

泉はそう言って笑うばかりだった。

どうやら、セシリアのコメントも“学校新聞”を作るにはふさわしくなかったようで、「捏造」の対象となったようだ。

「よし。じゃあ、セシリアちゃんがクラス代表を譲ったのは織斑君に惚れたからにしよう」

「なっ、な、ななっ……！？」

ポツと頬を真っ赤に染めて明らかに狼狽するセシリア。遙と泉は顔を見合わせて笑ってしまう。他の生徒も苦笑したり、リアクションはさまざまである。セシリアが一夏に恋心と抱いてから、たったの数十時間。しかし、周知の事実となるにはそれで十分なほど、セシリアは顔や行動に出やすいタイプのようにあった。

しかし、そんな誰でもわかりそうなことが感じられない鈍感さを持った男が一人、この場にいた。

「何を馬鹿なことを」

一夏は何を勘違いしたのかそんなことを言い始める。

「え、そうかなー?」

「そ、そうですね! 何をもって馬鹿としてるのかしら!？」

セシリアが怒って、一夏を睨む。一夏は自分がどうして怒られているのかさっぱり分かっていないようだった。

「大体あなたは」

そう、セシリアが一夏を責め立てようとした時、薫子が二人の間に割ってはいる。

「はいはい、とりあえずふたり並んでね。写真撮るから。注目の専用機持ちのツーショットもらうよ。あ、握手とかしてるといいかも」

セシリアが想い人とのツーショット写真が撮れると思って、もじもじし始め、拳句には着替えに行くと言い出す中、ギャラリーとなりそうな一組の生徒たちは、迅速に集合した。

「セシリアに抜け駆けはさせられないよね」

「一人だけ言い思いしようだなんて甘いんだから」

たった二・三言+目配せで意思の疎通を行うクラスメイト。にやりと笑って、サムズアップする姿に遙は思わず苦笑せざるをえなかった。

カメラの前に並んで、手を握る一夏とセシリア。セシリアはちらちらと一夏をみる。本人的には『安く見られないように』と意識しているのだが、周りから見るとただ単にテレテレしているようにしか見えないのであった。そんなセシリアを見て、『自分に用があるのだろうか』とトンチンカンな勘違いをした一夏は「なんだよ?」とセシリアに尋ねるが、「べ、別に、何でもありませんわ」とあしらわれる。一夏はじとーつと一夏とセシリアを見ていた筈にも同じことを尋ね、冷たくあしらわれていた。

「それじゃあ撮るよー。35x51÷24は?」

「え? えつと……2?」

薫子がヘンテコな掛け声と共にファインダーを覗き込む。その瞬間、いまや遅しと待ち構えていた一組＋が一夏とセシリアの周りに集まった。泉は遙の手を引き、無理矢理引きずり込む。

「ぶー、74・375でしたー」

ほんの数瞬後、パシヤツとシャッターの切られる音が鳴ったときには、一組（＋）の全体写真ができあがる。打ち合わせはしていない筈ですらファインダーの中、それも一夏の隣に立っていた。

「なんで全員入ってるんだ？」

「あ、あなたたちねえっ！」

一夏とセシリアが口々に言うのを、近くのクラスメイトがなだめる。「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」「クラスの思い出になっていいじゃん」「ニヤつきながらクラスメイトにそういわれては、セシリアも何も言い返せず、苦虫を噛み潰したような顔でうなるしかなかったのであった。

結局、この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続き、教師兼寮長こと織斑千冬に折檻（主に一夏）を受けて、お開きとなったのだった。

三話 反発係数1（後書き）

遅くなつてすいませんでした。引き続きお楽しみください。

五話 波乱の鈴の音

パーティーの翌日、今朝も変わるところなく遙は自分の教室のドアをくぐる。入学から数週間経って、遙もクラスメイトと打ち解けてきた。すれ違うクラスメイトと挨拶を交わし、席に着くと近くのクラスメイトが集まってきて、たわいも無い話に花を咲かせるのもおなじみのこととなっていた。ただ、今日は泉が朝からどこかへ行ってしまったので、それがいつもと唯一異なる点ではあったが。

「そつえば隣のクラスに転入生が来たって話題になってたよ」

話をしていると、そんな話題があがった。しかし、こんな時期に転入とは不自然である。諸事情で入学が遅れ、この時期に入学というのであればまだ分からなくもない話ではあったが。

「あれ？ この学園に転入するには国の推薦が必要だって誰かが話してた気が……」

別の一人がそんなことをいい、遙たちの間にしばしの静寂が訪れる。遙にはみんなの頭の上にハテナマークが見えた気がした。

「もしかしてまた代表ごう……」

しばしの思考の後、遙が口を開き言葉を継ごうとした瞬間、教室とドアが勢い良く開いた。「おっはよう！」という良く通る明るい声と共に、遙のルームメイト、泉が手を振りながら入ってくる。泉は遙達の集団を見つけ、まっすぐ向かってきた。

「おっはよう！ 何だか盛り上がってるようだね」

泉はニコニコしながら話の輪に加わる。遙は不自然な転入生の話をして聞いたことを泉に話す。それを聞いて泉はグッドタイミングと指を鳴らした。

「さつき二組の人からちょうどその話を聞いてきたんだ。その転校生、中国の代表候補生で来たばかりなのにクラス代表になったんだってさ」

「二組のクラス代表ってまだ決まっていなかったの？」

泉の話聞いていた一人が泉に尋ねる。泉は首を横に振った。

「何でも昨日の夜にクラス代表が変わってもらったらしいね。代表候補生がクラス代表になれば、クラス対抗戦の勝率はぐっと増すだろうから、ちょうど良かったんじゃないかな」

クラス代表戦とはクラス代表によるリーグマッチで、クラスの団結や実力を測るために行われるイベントである。しかしながら生徒たちにとって大切なのは優勝商品であり、やる気を出させるために一位クラスに学食デザートデザートの半年フリーパスが配られるのだった。各クラスの女子たち（一夏以外の全生徒といえなくも無い）はその商品を求めて燃え上がるのだった。

「なんだ」 せっかく専用機持ちはずちと四組しかいなくて、今回の優勝はもらったも同然とか思ってたのに」

さつきとは別の女子が悔しそうな顔をする。内心遙は、（四組にもいるから優勝同然だなんて言えないと思うけど……）などと考えていたが、あえて口に出すことは無かった。まあ精々織斑君には頑張ってもらおうという話になり、遙たちはまた関係の無い話題を話し始めた。そんな時、ちょうどその織斑君の声が教室に響く

「鈴……？ お前、鈴か？」

一夏の視線の先にクラス中の視線が集まる。そこに立っているのは腕を組み、ドアにもたれかかっている黒髪の少女。腰くらいまであるツインテールを揺らし、気の強そうな目でクラスを見渡した。その瞳はいかにもチャイニーズの美女……いや、美少女といった雰囲気をもっている。

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと笑って、鈴は一夏を見据えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3547t/>

Overlap -Instead of Infinite Stratos's Story-

2011年6月21日18時25分発行